

百間村由緒和讃

(表紙)

「 (一九二九年)

昭和四年水無月

百間村 由緒 和讃

有喜亭

中村氏

作印 一

帰命頂礼武蔵野に、其の名も高き百間村、名称の由来を尋ぬれば、今を去ること千余年、年は大同の頃なるが、西と東二陣屋あり、陣屋と陣屋の其間、丁度百間ありし故、百間村とぞ名付たり、旧高三千有余石、字は七つに分けられて、小字の数は七十二、北と東の村さかへ、古利根川の水清く、夏の涼みの心地よや、南をめぐる隼人川、西は金谷の出土ヶ原、神代の昔国々の、船の出入に賑はへし、港の地とぞ伝へきく、中央を貫らぬく東武線、日光線の分岐点、杉戸駅より乗り下りの、汽車の便利のたよりよき、名所霊地あまたある、中にめいさつ西光院、由緒古き大伽藍、畳の敷も五百畳、真言宗の支務所なり、境内広く木々茂り、昼高ほ暗らく夏寒し、雲つく杉の木の下に、安置ましますみだ如来、勿体なくも国宝の印綬を賜へし御像なり、御堂は名匠甚五郎が、一夜作りのものとかや、聖僧行基大菩薩、雹乱除けの御祈願所、残る古跡の行基墳、霊験今にあらたにて、近郷近在亦遠く、詣づる人は織る如く、八百比丘尼にゆかりある尼沼古えて杳掛けの、なさは深き地蔵尊、行くば間もなく前原の、宝性院のお釈迦堂、後生大切と懸命に、祈る心は石よりも、堅き心の金谷村、南無や大悲の遍照院、日は西原に入相の、鐘の音聞えて青林寺、観音菩薩を伏しおがみ、辿る星谷の月明り、宿や山崎通り越し、祈る心は赤まつに、浅間山へ参詣し、下る大谷の土手八丁、雨もふらぬに笠原の、沼に蓮華の花盛り、稲荷の森を夜目にみて、たどりて行けば道佛の、迷ひの夢を医王院、中須を過ぎて老人の、気も若宮の青蓮庵、心は丸き柚の木の、身をぞ清むる浄蓮寺、心の垢を洗ひなば、望し願成就まのあたり、家運長久富み栄え、福は内野の正福坊、南無ありがたや、ありがたや

念仏始め 御詠歌

ありがたや、ふくはうちのと、打つかねに、おにはそといと、おくる、ねんぶつ
つみとがも、いつかきへなん、あさゆふに、われをわすれて、となへ、ねんぶつ
(狂歌和讃)
うんとくへ、うんとはたらけ、うんとため、おえてしんごん、するぞよからめ印